

御嶽山 奥の院下の噴気孔の活動低下

概 要

2018年10月25日に御嶽山奥の院下の2014年噴火口後の噴気孔の観察を行ったところ、2017年7月と比べて噴気の勢いが著しく弱くなり、温度も73.6℃と沸点以下の温度となっていることを確認した。

本 文

2014年9月27日の噴火で御嶽山の奥の院の下に開口した火口(図1)は、その後も活発な噴気活動を続けていたため注意すべき噴気孔の一つとなっていた。しかし、2018年10月25日の調査では、以下のように活動を低下していた。

2014年9月の観察では、活発な噴気孔が2つ確認されたが(図2)、2018年10月では噴気孔の直径が1mほどのものが1つ観察できるのみとなっていた(図3)。そこからの噴気の勢いは弱く、ジェット音などはせずに静かに噴気をあげている状態である(図3、4)。噴気孔の中に熱電対を刺して温度を測定したところ、73.6℃であった。2017年9月の気象研の観測(第139回予知連資料)では、90.1℃であったので、温度の低下は間違いない。また、噴気孔の周囲には硫黄の付着が認められる(図4)が少なく、すぐ横に立ってもガス臭は弱い。H₂S監視用のガス検知器の計測値は噴気の脇では0ppm、噴気にかざすと18ppmであった。



図1 奥の院下の火口位置

この地図の作成には国土地理院の電子地図(電子国土Web サービス)を使用した。



図2 2017年7月7日の噴気孔



図3 2018年10月25日の噴気孔



図4 噴気孔の拡大(2018年10月)。硫黄の付着は少ない。